

# 母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的 ならびに社会小児科学的意義に関する研究班

## 総括研究報告

班長 小林 登（東京大学医学部小児科）

わが国の先進化、工業化、さらに生活圏の都市化に伴って、生活一般は豊かになったが、小児の生活環境は急速に変化し、その結果として、小児科学、育児学、保育学、さらに教育学の実践的な分野で多くの問題がみられている。例えば、親子関係の失調、虐待児問題、心身障害児の療育、育児障害、さらに委託育児、登校拒否、暴力などはその代表であろう。これらの問題を解決するためには小児科学や医学のみでは充分でなく、保育学、教育学、心理行動科学などと連絡して、問題を包括的にとりあげなければならない。

本研究班は昭和55年に母子相互作用、mother-infant interaction ならびに親子関係を中心として妊娠、分娩、出生の時点より乳児幼児の育児、保育のあり方を産科学的、小児科学的、発達心理学的、行動科学的、さらに教育的に研究し、あわせて、その社会的意義を調査分析することを目的として発足し第2年度を終了した。

第2年度も班員は全国の関係分野の専門家から選び、小児科学者21名、産科学者4名、心理・教育・保育学者7名、その他4名、計36名をもって編成した。さらにこの問題に関心のある学識経験者5名を評価委員に依頼した。

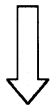
とりあげられた研究プロジェクトは初年度と同じで、主なものは次のように整理することが出来る。

1. 母子相互作用の行動科学のおよび情報科学的分析
2. 胎児・新生児・乳児の行動発達
3. 乳児の愛着（attachment）形成のメカニズムの分析
4. 母性確立のメカニズムの分析
5. 母親の育児行動ならびに育児意識の分析
6. 母親の育児における意義
7. 心身障害児の親子関係の分析
8. 分娩形式ならびに新生児の養育方式と母性意識の関係
9. 母性剥奪症候群の内分科学
10. サルなどの動物による育児の実験的研究
11. 日本各地における育児の実態調査

本年度はクリーブランドのウェスタンリザーブ大クラウス教授の来日の機会をとらえ、実りある班会議を開くことが出来た。

研究協力者さらに評価委員の全員は本研究は学術的な面のみならず、学際的な班編成で社会的な面でも極めて重要な意義を有するものである点で一致した。基礎的な面では母子関係成立のメカニズム、すなわち、児の母親に対する愛着、さらに母親の児に対する母性の形成は生物学的、あるいは生得的（遺伝的）な因子と共に環境的（文化的）な因子が関与することが示された。社会的な面では母子関係、親子関係がうまくいくような環境をいかに形成するか、委託育児の水準をいかにあげるかなどの具体的な問題が検討された。また日本各地の育児の実態を明らかにすることが出来た。

第3年度は本年度の成果をふまえて、本研究班の所期の目的を果たし、全体としてまとめたい。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



わが国の先進化,工業化,さらに生活圏の都市化に伴って,生活一般は豊かになったが,小児の生活環境は急速に変化し,その結果として,小児科学,育児学,保育学,さらに教育学の実践的な分野で多くの問題がみられている。例えば,親子関係の失調,虐待児問題,心身障害児の療育,育児障害,さらに委託育児・登校拒否,暴力などはその代表であろう。これらの問題を解決するためには小児科学や医学のみでは充分でなく,保育学,教育学,心理行動科学などと連絡して,問題を包括的にとりあげなければならない。

本研究班は昭和 55 年に母子相互作用,mother infant interaction ならびに親子関係を中心として妊娠,分娩,出生の時点より乳児幼児の育児,保育のあり方を産科学的,小児科学的,発達心理学的,行動科学的,さらに教育学的に研究し,あわせて,その社会的意義を調査分析することを目的として発足し第 2 年度を終了した。

第 2 年度も班員は全国の関係分野の専門家から選び,小児科学者 21 名,産科学者 4 名,心理・教育・保育学者 7 名,その他 4 名,計 36 名をもって編成した。さらにこの問題に関心のある学識経験者 5 名を評価委員に依頼した。